よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—

8

よろこびの知らせ
第 8 集

目　　次

見よ、神の小羊 …… 1
ヨハネ 1:29-34

故郷のイエス …… 10
ルカ 4:16-21

イエスの宣教 …… 19
ルカ 4:38-44

イエスに従う …… 28
ルカ 5:1-11

ここに収められたのは、2020 年 4～5 月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は “Gospel Project” に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2020, Philip Nakao

見よ、神の小羊
ヨハネ 1:29-34

1:29 その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て
言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。
1:30 『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方で
す。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方の
ことです。
1:31 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、私が来て水で
バプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにさ
れるためです。」
1:32 そして、ヨハネはこのように証しした。「御霊が鳩のように
天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました。
1:33 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテス
マを授けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。『御
霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見た
ら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。』
1:34 私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証し
をしているのです。」

一、小羊イエス

イエスは、聖書でさまざまな名前で呼ばれています。イエスについての最初の預言は創世記 3:15 ですが、そこではイエスは「女の子孫」と呼ばれています。創世記 3:15 の預言は、イエスが処女マリアより生まれ、人となってくださったことによって成就しています。イエスは創世記 49:9 では「ユダ族のライオン」と呼ばれ、黙示録 5:5 や 22:16 でも、イエスは「ユダ族から出たライオン、ダビデの根、明けの明星」と呼ばれています。こうした

呼び名は、イエスが全世界の王であり、私たちの希望であることを言い表しています。イザヤ 9:6 には「不思議な助言者」「力ある神」「永遠の父」、「平和の君」という四つの呼び名があります。イエスは、まさに、そのようなお方で、どれも、イエスにふさわしい呼び名です。

　ところが、バプテスマのヨハネはイエスを「神の小羊」と呼びました。イエスは「百獣の王」ライオンになぞられられているのに、ヨハネはイエスを「小羊」と呼んだのです。イエスは、ご自身がそう仰ったように、「羊飼い」であるのに、その羊飼いに飼われる「小羊」だと言うのです。これは、ずいぶん矛盾しているように思われます。けれども、こうした「矛盾」は聖書の中にいくつもあります。イエスは「神の子」と呼ばれ「人の子」とも呼ばれています。「裁判官」と呼ばれ、また「弁護人」とも呼ばれています。「主」と呼ばれ、また「しもべ」とも呼ばれています。こうした一見「矛盾」に見える呼び名は、かえって、イエスがまことの救い主であることを表しているのです。イエスは「神」であり「人」であるからこそ、神と人との間に立って、人を救うことがおできになる。世界を審くべきお方だからこそ私たちを弁護する方法をご存知である。イエスは、あらゆるものの上に立つ「主」であるのに、人を救うため「しもべ」となってくださった。イエスのさまざまなお名前は、そうしたことを教えています。イエスが「ライオン」であり、「小羊」である。そこに私たちの救いが

あるのです。

二、十字架の小羊

「見よ、神の小羊。」ここでの「小羊」は、神にささげられる「犠牲」としての「小羊」のことを言っておりこれは、イエスがどのようにして救いのわざを果たそうとしておられるかを預言するものでした。旧約時代、人々は罪の赦しのために動物の犠牲を捧げましたが、人々は、犠牲をささげる時、犠牲となる動物の頭に手を置きました（レビ 1:4）。それは、その動物が、その人の身代わりになることのしるしでした。罪のない動物が人間の罪を背負ったのですが、それは、私たちの罪を背負って、罪のない神の御子イエスが、身代わりとなって死んでゆかれることを予告するものだったのです。

イエスの身代わりの死は、イザヤ書 53 章に驚くほど詳しく預言されています。イザヤ書はイエスが世においでになる 800 年も前に書かれたものですが、まるで、イエスの十字架の後に書かれたもののように、イエスの身代わりの死を描いています。

まず 1-3 節はこう言っています。「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私

たちも彼を尊ばなかった。」イエスは神の御子であるのに、貧しく育ち、人々はイエスを「ナザレのイエス」「大工の子」と呼んでさげすみました。イエスが十字架にかけられた時には、「たった今、十字架から降りてもらおうか。われわれは、それを見たら信じるから」（マルコ 15:32）と言って嘲りました。

続く 4-6 節ではこう言われています。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」2004 年に作られた “The Passion of the Christ” という映画は、ゲツセマネの園で捕まえられ、大祭司とピラトの裁判を受け、十字架につけられ、息絶え、墓に葬られるまでのイエスの最後の一日を描いています。イエスがローマ兵によって鞭打たれるところは、目をそむけたくなるほど残酷なシーンですが、実際も、映画の通りだったと思われます。ユダヤでは人を鞭打ちときは、四十回までと定められていましたが（申命記 25:3）、ローマにはそんな決まりはなく、屈強なローマの兵士たちが、革紐に鉛を埋め込んだ鞭を思うがままにふるったのです。この映画はそれをこれでもかというほど映していますが、それは

そこに、この映画のテーマがあったからです。この映画の最初に、「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって私たちはいやされた」というイザヤ 53:5 の言葉が映し出されてされています。イエスが受けたあの苦難は、私たちの罪のためであって、イエスはその苦しみによって、私たちの罪を赦し、私たちに平安と癒やしを与えてくださった。この映画はそのことを伝えようとしているのです。

イザヤ 53 は「苦難のしもべ」の章と呼ばれていますが 7 節で、この「苦難のしもべ」がまるで「小羊」のようであったと言っています。「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」イエスは、この言葉通り、黙々と苦難に耐え、十字架を背負い、救いのみわざを成就していかれました。

「神の小羊」とは、「神ご自身が備えてくださった小羊」という意味です。普通、犠牲は、人間から神に捧げるものです。しかし、人間の側に、罪のための完全な犠牲などありません。何万匹の犠牲の動物であっても、何十億という財産であっても、あるいは、だれもが褒めるような善行、ごく少数の人しか成し遂げられない難行苦行であっても、それによって自分を救い、他の人をも救うことはできません。ただ神が備えてくださった犠牲、

「神の小羊」であるイエス・キリストだけが私たちに完全な救いをもたらすのです（ヘブル 10:10）。聖書は「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです」（ペテロ第一 1:18-19）と言っています。

三、天の小羊

イエスは神の小羊となって、ご自分を神への供え物としてささげ、十字架の上で死んでゆかれました。しかし、三日目に「死人のうちよりよみがえり」、四十日して「天に昇り」、今、「全能の父なる神の右に座して」おられるます。では、天におられるイエスは、もう「神の小羊」ではなくなったのでしょうか。いいえ。黙示録 5 章には、天での礼拝が描かれているのですが、イエスはそこで、父とともに礼拝をお受けになる「小羊」、しかも「ほふられた小羊」と呼ばれています（黙示録 5:6, 8）。イエスは、天においても「神の小羊」です。黙示録は、最後の 22 章まで、イエスをずっと「小羊」と呼んでいます。

それは、イエスが何度も、ご自分を犠牲として捧げておられるという意味ではありません。聖書が言うように、イエスはただ一度だけ、ご自身を捧げ、完全に救いを成し遂げてくださいました。それは何度も繰り返されなければならないような不完全なものではないのです（ヘブル 7:27, 9:12, 9:26-28, 10:10、ペテロ第一 3:18）。

けれども、イエスが天においても「小羊」と呼ばれているのは、私たちが小羊イエスによって救われていることを覚えるためです。イエスが小羊となって私たちの罪を贖ってくださったことは、私たちが地上にいる間に感謝することだけではないのです。私たちが天に行ったときには、もっとそれに感謝し、そのことのゆえに父なる神と主イエスをほめたたえるのです。

「子羊をば」という賛美（新聖歌 4）の第 2 節はこう歌っています。

　み使いらも　うち伏すまで
　わが主の御傷は　照り輝く
　いざみ民よ　救いの主に
　栄えの冠を　捧げまつれ

イエスは復活ののち、弟子たちに、ご自分の手にある釘跡や、槍で刺し通された脇腹の傷跡を見せましたが、そうした傷跡は、復活のからだに残されていたのです。そして、それは今も、主の栄光のからだに残され続けていることでしょう。この賛美のように、天使たちも、その傷跡に輝く栄光にひれ伏して、小羊イエスを崇めていることでしょう。

この他にも、「小羊イエス」を歌った賛美は、いくらもあります。そうした賛美を聞いたり、歌ったりするたびに、イエスが、犠牲の小羊となってくださったこと、十字架で流してくださった血潮によって私たちの罪が赦され、その打ち傷によって私たちが癒やされていることを心から確信し、そのことのゆえに、もっとイエスに信

頼していきたいと思います。

私たちの贖いは、霊的にはすでに成就していますが、私たちのからだの贖いや、世界の回復は、まだ成就していません。近年、自然破壊が進みました。今までなかった病気が各地で発生し、世界に広がるようになりました。物質的に豊かになった分だけ、人々のたましいはやせおとろえています。私たちは、そうした状況を嘆くだけでなく、少しでも改善されるようにと祈り、また努力していますが、罪も死も病いもない世界は、主イエスによらなければ達成できません。その血によって私たちを贖ってくださったイエスは、今も、世界の回復、救いの完成のために働き続けてくださっている「神の小羊」です。誰もが、回復の時、救いの完成の時が近づいていることを感じています。この困難な時こそ、天の御座におられる「小羊」イエスを仰ぎましょう。そして、主がもう一度来られることを、忍耐をもってち望みましょう。

（祈り）

父なる神さま。あなたは、あなたの御子を、私たちの救いのため、犠牲の小羊として世に送ってくださいました。御子イエスは今も、天で「小羊」と呼ばれ、私たちの救い主として、あなたと私たちとの間にいて、私たちのためにとりなしておられることを感謝します。「見よ、神の小羊」との言葉の通り、預言者が示し、使徒たちが証しした「小羊イエス」を、仰ぎ見ることができるよう、聖霊の助けを与えてください。私たちの心が、この世のものに惹かれたり、この世に起こる出来事で重く

沈むとき、よりいっそう目をあげて「小羊イエス」を仰ぎ見ることができますように。主イエスのお名前で祈ります。

故郷のイエス
ルカ 4:16-21

4:16 それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。
4:17 すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。
4:18 「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、
4:19 主の恵みの年を告げ知らせるために。」
4:20 イエスは書を巻き、係の者に渡してすわられた。会堂にいるみなの目がイエスに注がれた。
4:21 イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」

一、会堂での礼拝

ユダヤの人々は紀元前 586 年に神殿を失いました。その時、神殿に代わる「祈りの家」として「会堂」が生まれました。神殿は、70 年後の紀元前 515 年に再建されましたが、「会堂」はその後も残り、ユダヤの人々の生活になくてならないものとなりました。紀元 70 年、再建された神殿も滅ぼされ、ユダヤの人々は世界中に離散しましたが、人々はどこに行っても、そこに会堂を建てました。

ユダヤの会堂は「シナゴーグ」（Synagogue）、あるいは「コングリゲーション」（Congregation）と呼ばれます。ダラス地区にもおよそ 20 ほどのシナゴーグがあります。その分布を調べてみると、ノース・トールウェーとフリーウェー 75 に挟まれた地域に、南から北へと伸びていること

が分かります。ユダヤの人々は、できるだけシナゴーグの近くに住もうとしますので、そういう分布になったのでしょう。

ユダヤ教のシンボルはイスラエルの国旗にも使われている「ダビデの星」ですが、分布図の中に、ひとつだけ、キリスト教のシンボルである「十字架」がついたものがあります。これは、「メサイアニック・ジューズ」（Messianic Jews）と呼ばれるグループで、イエス・キリストを信じているユダヤの人々のコングリゲーションです。メサイアニック・ジューズの礼拝は土曜日に行われますので、一般の教会を借りて集まりをしているところが多くあります。メサイアニック・ジューズと一般の教会は同じ信仰を持っていますので、一般の教会がメサイアニック・ジューズの建物を日曜日に借りる場合もあります。

そうした集まりに参加すると分かりますが、そこでの礼拝は、律法の朗読とその解説が中心となっています。ユダヤの人々は毎年、1 年かけて聖書日課に従って「律法の書」（創世記から申命記）を読み、学びます。会堂での礼拝でも、それぞれの安息日に、「律法」と「預言者」の箇所が割当てられ、その朗読に続いて説教がなされます。きょうの箇所の 16-17 節に「それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた」とありますが、イエスは、預言書からの朗読と、そこからの説教を任せられていたのです。イエスが朗読し

た箇所はイザヤ 61:1-2 でした。

そこには、旧約でこう書かれています。「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め（るために。）」「主の霊が、わたしの上にある」「主はわたしに油をそそぎ」というのは、メシア、救い主のことを言っています。「キリスト」というのは、ヘブライ語の「メシア」を訳したもので、それには「油注ぎを受けた者」という意味があります。イザヤ 61 章は、神が、やがて聖霊の油注ぎを受けた救い主、「キリスト」を遣わし、「主の恵みの年」という新しい時代をもたらすという預言、また約束の言葉です。ユダヤの人々は、この預言が成就する日を待ち望みながらバビロン、シリア、またローマなどの大帝国のもとでの苦しみに耐えてきたのでした。

二、イエスの説教

朗読が終わると、人々の目はイエスに注がれました（21 節）。ナザレの町はイエスが育ったところでしたから、町の人々は、イエスを良く知っていました。けれども、イエスがナザレの会堂で説教するのははじめてのことだったのでしょう。人々は、あの「ヨセフの子」がどんな説教をするのだろうかと好奇の目を注いだのです。

その時、イエスは「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました」（21 節）と

言って説教を始めました。普通、会堂での説教では、朗読された箇所の事細かな解説がなされるものです。イザヤ 61:1-2 なら、メシアがどんな人物であり、神の民に何をもたらしてくれるのか、また、この約束を与えた神の真実や、その約束に対する神の民の信仰などについて語られることでしょう。ところが、イエスの説教は、いままでの説教とは全く違っていました。イエスの説教は、聖書の言葉の解説ではなく、「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました」（21 節）という、約束成就の「宣言」でした。これは、マタイの福音書やマルコの福音書に「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」（マタイ 4:17）「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）とあるのと同じく、「神の国」の到来を告げ知らせるものでした。

「主の恵みの年」、また「神の国」は救い主によってもたらされます。イエスが「主の恵みの年」の開始を告げ、「神の国」を宣言しているということは、とりもなおさず、イエスがご自分を「救い主」だと宣言していることになります。実際、聖書を読むと、いたるところで、イエスはご自分が救い主であることを明らかにしています。イエスの教えは、人々に、ご自分を示すもの、ご自分についての教えでした。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）これは、私たちにとって、な

んと慰め深い言葉でしょう。実際多くの人が、この言葉によって絶望や困難から立ちあがってきました。しかし、これは、ユダヤの人々には冒瀆の言葉に聞こえたでしょう。なぜなら、イエスは「わたしのところに来なさい」「わたしが…休ませてあげます」と言って、神を信じるのと同じように、ご自分に信頼するようにと教えたからです。

イエスはまた、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」（ヨハネ 14:6）と言いました。よく、「イエスはキリスト教の教祖である」と言われます。しかし、まともな宗教の教祖なら、このようなことは言わないでしょう。「そこに道がある。それに歩め。そこに真理がある。それを探求せよ。そこに命がある。それを得よ」と言うはずです。宗教の教師とは、他の人に、道を教え、真理を明らかにし、命を示す者であって、みずからが「道であり、真理であり、命である」などというのは、宗教の教師の領域をこえています。ところがイエスは、「わたしを信じなさい」「わたしに従いなさい」「わたしを愛しなさい」と言っています。「わたしは…」、「わたしに…」、「わたしを…」という言葉を繰り返し語っています。イエスが宗教の教師、教祖だというなら、ただ「神を信ぜよ」と言うだけで終わり、そんな自己主張はしなかったはずです。イエスのこうした言葉は何を意味するのでしょう。聖書の全体から導き出される結論はただひとつで

す。イエスは、その言葉どおり、神であり、救い主であるということです。イエスは、私たちに信仰を教えるお方であると同時に、私たちが頼り、愛し、従うべき、信仰の対象であるお方だということです。

どんなに熱心に聖書を読み、学んだとしても、もし、イエスが誰であるのかを知らなければ、聖書の約束する救いは私たちのものとはなりません。イエスは「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」（マタイ 16:15）と問いかけています。「あなたは、生ける神の御子キリストです」（マタイ 16:16）と答える人は幸いです。

三、イエスへの応答

イエスの説教を聞いた人々は「イエスをほめ、その口から出る恵みのことばに驚き」ました（22 節）。人々は、今まで聞いたことのない説教を聞きました。イエスが語る言葉はどれも正しいもので、誰もそれに反論できませんでした。それが「恵みの言葉」であることを認めざるをえませんでした。人々は、それまで何度も繰り返し会堂で朗読されきた聖書の言葉のほんとうの意味を、この日、はじめて知ったのです。

ところが、人々はイエスの正しい言葉に従いませんでした。その恵みの言葉に感謝しませんでした。むしろ、それに対して敵意と反感をもって答えました。イエスに対して怒り、町の崖から突き落とそうとさえしたのです（ルカ 4:28-29）。なぜ、そんなことになったのでしょうか。それは、22 節に「この人はヨセフの子ではないか」とあるように、先入観でイエスを判断したからでした。

マタイ 13:55 には、故郷の人々が「この人は大工の息子ではありませんか」と言ったとあります。人々はイエスを「大工の息子」と呼びましたが、そこには軽蔑の意味が込められています。「大工」と訳されている言葉はもとの言葉で「テクトーン」と言い、「手を使って働く者」という意味があります。この言葉から “technician” という言葉が生まれました。ユダヤでは、手ずからの労働が重んじられました。使徒パウロは、「自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい」（テサロニケ第一 4:11）と教え、「あなたがた自身が知っているとおり、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました」（使徒 20:34）とも言っています。けれども、ナザレの人たちは、「テクトーン」という言葉を「下働きの人」という意味で使いました。今日でも組織上は “technician”（工員）は、“engineer”（技術者）の下にあり、“carpenter”（大工）は “architect”（建築家）の下にいると考えられているのと同じです。人々は、イエスを自分たちの考えで判断して、イエスを軽蔑し、斥けたのです。

こんな話があります。ある夫婦が、礼拝を終えて家に帰る車の中で、その日の礼拝の説教者について話していました。その日は、ゲストスピーカーが説教をした日でした。妻が夫に言いました。「きょうのゲストスピーカーは背が高くて、とてもハンサムだったわね。」夫も「話しぶりも堂々としていてよかったよ」と答えていました。そんな両親の話を聞いていた子どもが、後ろの座

席から言いました。「でもね、あの先生、背が高かったから、きょうは、先生の後ろの十字架が良く見えなかったよ。いつもの先生なら、よく見えるんだけど…。」子どもがそう言うのを聞いて、その両親は、考え始めました。「そうだね。私たちは、説教者を見に行ったんじゃなかったはずだ。」「そう、外見や話しぶりばかり見ていて、わたし、きょう、何を聞いたか覚えていないわ。」「私たちは礼拝で、神の言葉を聞き、イエスさまを見上げることを忘れていたね。」この夫妻は、子どもの言葉によって、大切なことを思い起こし、大いに反省したということでした。

私たちも、イエスを知らない時は、イエスを信じない人々が言うように、イエスを「宗教の教師」と考えていました。また、イエスを信じ、聖書の知識が増えた後でも、「私はイエスについてよく知っている」と思い込んで、自分が作り上げた「イエス像」でイエスを見、それをイエスに押し付けてしまうことがあるかもしれません。イエスの故郷、ナザレの人々が「自分たちはイエスをよく知っている」言って、イエスとイエスの言葉を判断してしまったのと同じです。私たちが主の導きに従わなければならなのに、「イエスさま、今、こんなことをなさってはいけません。今すぐ、このことをしてください」などと言って、イエスを自分の予定や計画に従わせようとするようなこともあるかもしれません。私たちも、正しい心で御言葉を聞き、正しくイエスの声を聞いているだろうか、御言葉が示すイエスを正しく認めてい

るだろうかと、みずからを省みたいと思います。そして、いつでも、へりくだってイエスを仰ぎ見たいと思います。

（祈り）

父なる神さま。「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」（ヨハネ 1:11）この御言葉が心に響きます。あなたは、救い主、キリストを、まず、ご自分の民のところに送られたのに、人々は自分たちの救い主を斥けました。私たちも同じ道を歩むことがありませんよう助けてください。むしろ、あなたの民とされた私たちが、常にイエスを主とし、イエスに従って生活することができるようにしてください。イエスのお名前で祈ります。

イエスの宣教
ルカ 4:38-44

4:38 イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家にはいられた。すると、シモンのしゅうとめが、ひどい熱で苦しんでいた。人々は彼女のためにイエスにお願いした。
4:39 イエスがその枕もとに来て、熱をしかりつけられると、熱がひき、彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた。
4:40 日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた。
4:41 また、悪霊どもも、「あなたこそ神の子です。」と大声で叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは、悪霊どもをしかって、ものを言うのをお許しにならなかった。彼らはイエスがキリストであることを知っていたからである。
4:42 朝になって、イエスは寂しい所に出て行かれた。群衆は、イエスを捜し回って、みもとに来ると、イエスが自分たちから離れて行かないよう引き止めておこうとした。
4:43 しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、どうしても神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」
4:44 そしてユダヤの諸会堂で、福音を告げ知らせておられた。

故郷のナザレの町で斥けられたイエスはガリラヤ湖に面したカペナウムの町に来ました。ガリラヤ湖の回りには大きな町が数多くあり、そこは山里のナザレから見れば、うんと賑やかなところでした。まず、南のほうにはテベリヤがあり、そこにはガリラヤとペレアの領主ヘロデ・アンテパスの宮殿がありました。そこから北に行くとマグダラの町があります。マグダラのマリヤの出身地です。それから、ゲネサレの平原があります。ここは、

イエスが五つのパンと二匹の魚で五千人の人々に食事を与えた場所です。そして、そこから少し行ったところが、カペナウムです。

イエスはこの町で、ローマの百人隊長のしもべやペテロのしゅうとめの病気を癒やしています（マタイ 8:5-17）。カペナウムは交通の要所でしたので、収税所がありました。イエスはそこで働いていたマタイをご自分の弟子に加えています（マタイ 9:9）。また、イエスは、この町で会堂司ヤイロの娘を生き返らせ、盲人の目を開いています（マタイ 9:23-31）。マタイは 9:1 で「イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた」と言って、カペナウムをイエスにとっての「自分の町」と呼んでいます。カペナウムは、イエスのガリラヤでの宣教の本拠地とも言えるところでした。きょうの箇所では、イエスが、この町での宣教で行った三つのことが書かれています。

一、病人の癒やし

最初は「病人の癒やし」です。ある安息日に、イエスはカペナウムの会堂を出て、会堂の目の前にあるシモン・ペテロの家に入りました。その時、ペテロのしゅうとめが、高熱で苦しんでいたので、人々がイエスに癒やしを願ったのです。イエスはたちどころに彼女を癒やしました。するとすぐに、しゅうとめは、イエスと弟子たちをもてなし始めました（38-39 節）。自分の病気を治してくれた人に感謝するのは、当たり前といえば当たり前ですが、この時、しゅうとめには、人間的な感謝以上の

ものがあったに違いありません。おそらく、イエスを特別なお方として自分の家に迎え、イエスに仕えることを喜びとしたのでしょう。

私は、さきほど、「病気の癒やし」とは言わず、「病人の癒やし」と言いました。これは大切なことです。医学はさまざまな「病気」を治すことができるようになりました。しかし、病気が治っても、希望のない暗い人生を送る人がいますし、逆に、不治の病の中でも感謝や喜びをもって生きている人もいます。私が日本にいたころ、教会に何人かの看護師や看護学校の学生たちが来ていました。そのひとりがこう話してくれました。「ある若い女性の手術が成功して完治したのに、その人は病院の屋上から飛び降りて死んでしまったのです。その時ほど、病気を治すことができても、その人を癒やすことができない、医学の限界を感じたことはありません。」今日では、「全人的癒やし」（holistic therapy）ということが叫ばれるようになりましたが、それができるのは、イエスだけです。イエスだけが「病気」を治すだけでなく、「病人」を癒やすことが出来ます。医学は人をより長く生かすことはできても、人をより良く生かすことはできないのです。

ギリシャ語で「救い主」（Σωτήρ）という言葉には「癒やし主」という意味があります。イエスはまさに、人を癒やし、世界を癒やすお方です。夕方になり、安息日が明けると、人々はイエスの評判を聞きつけて、病人をイエスのところに連れてきましたが、イエスは「ひとりひ

とりに手を置いて、いやし」（40 節）ました。イエスの癒やしは、イエスのあわれみから出たものであり、また、イエスこそ、まことの「ソーテール」（救い主）であることを証しするものでした。

二、悪霊の追放

次は悪霊の追放です。41 節に「また、悪霊どもも、『あなたこそ神の子です』と大声で叫びながら、多くの人から出て行った」とあります。この世界には、目に見える現象をどんなに分析しても説明のつかないものがあります。私たちの目には隠されている霊の世界があり、霊的な力があるのです。そういったものは、普段は隠れているのですが、神の著しい力があらわされるときには、目に見える形で表われてきます。神の御子であるイエスが宣教の働きを始めたときには、悪霊もまた活発に働いたのです。

しかし、イエスは、そうした霊的なものに対しても力を持っています。イエスは人々の肉体を蝕む病気を癒やす力を持っているだけでなく、人々のたましいを束縛している霊を追放し、たましいを解放する力をも持っておられるのです。人間は霊的な存在です。その問題が実際的なものであれ、精神的なものであれ、目に見える部分や人間のレベルでの問題が解決したからといっても、それはほんとうの解決にはなりません。霊的な問題が解決され、その束縛から解放されなければ、私たちのたましいに本当の自由はやってこないのです。過激な演説によって群衆を動かしたり、人々を感動させる話術を持っ

た人は、かつて大勢いましたし、今もいるでしょう。しかし、イエスのように、霊的な世界に対してさえ権威をもって語ることのできる人は誰もありません。目に見えない世界にまでに及ぶイエスの権威ある言葉だけが、私たちを霊の束縛から解放し、私たちに救いをもたらすのです。イエスだけが、ご自分のもとに来る者に、「あなたの罪は赦されています。…あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい」（“Your sins are forgiven. Your faith has saved you; go in peace.”）と語ることができます（ルカ 7:48-50）。私たちは、このお方によって、罪の赦しから来る、本物の平安を得ることができるのです。

ところで、ルカ 4:34 にこう書かれています。「ああ、ナザレ人のイエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょう。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」これは、イエスがカペナウムの会堂で福音を語ったときに悪霊が言った言葉です。「神の国」の「福音」は、それを待ち望んできた者には「救いの言葉」ですが、悪魔やその手下である悪霊にとっては、恐ろしい「審判の宣告」でした。彼らにはすでに審判がくだされ、「滅び」が定められており、それは決して覆されることはありません。しかし、人間は、罪を犯し、悪を行なったとしても、そこから悔い改めて神に立ち返るなら、救いへと入れられるのです。すべての人は、悔い改めへと招かれており、神に立ち返る恵みが与えられているのです。それ

が悪霊と人間との違いです。私たちは、この神の人への愛を、どんな時でも決して忘れないようにしたいと思います。

三、福音の宣教

そして、イエスは、神の国の福音を伝え、教えました。カペナウムでは「安息日ごとに、人々を教え」ました（ルカ 4:31）。そして人々は、「その教えに驚」きました（ルカ 4:32）。ユダヤの教師たちは「ラビ」と呼ばれしたが、イエスの教えは、どのラビの教えとも違っていたからです。それまでのラビたちは律法を解説するだけでしたが、イエスは律法が預言している「神の国」が到来したと告げたのです。「神の国」は「神の支配」と言いかえることができます。神の力ある支配は同時に恵み深いものであって、それが、今、ここに来ているというのが、イエスの教えであり、それは「神の国の福音」と呼ばれています（43 節）。

イエスは病人を癒やし、悪霊を追い出し、福音を宣べ伝えましたが、その中で一番大切なことは、福音を宣べ伝えることでした。病人を癒やすことも悪霊を追い出すことも大事なことですが、福音を宣べ伝えることにくらべれば、それらは、やはり、第二、第三のことです。それらは福音を証しすることにおいて、はじめて意味を持つのです。

イエスは十二弟子を派遣する時、彼らに「すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威」を授けました（ルカ 9:1）。悪霊を追い出し、病気を治すことは、

その時のユダヤの人々には必要なことでした。しかし、十字架と復活の後、天に昇る前には、イエスは、福音を伝えることだけを命じています。「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」（マタイ 28:19-20）「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ 16:15）「その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。」（ルカ 24:47-48）「使徒の働き」にも悪霊の追放や病人の癒やしのことは数多く出てきます。しかし、「使徒の働き」は、そうしたことよりも、福音の広まりを大切なこととして描いています。使徒 6:7 に「こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった」とあり、使徒 12:24 には「主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った」とあります。使徒 13:49 にも「こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった」と繰り返されています。

イエスは「神の国」を宣べ伝えました。「神の国」は決して、人々の理想の中だけにある「ユートピア」ではありません。「ユートピア」は「ウートピア」とも言われます。「ユートピア」なら「良いところ」ですが、

「ウートピア」なら「どこにもない場所」という意味になります。「ユートピア」はしょせんは「ウートピア」、ほんとうはどこにもないのだということは、誰もが知っています。しかし、神の国はそうではありません。イエスが世に来られて以来、それは福音の広がりとともに、全世界に広がっています。多くの人々が福音を聞き、信じることによって、神の国を自分の人生に受け入れ、神の国の国民とされてきました。神の国がもたらす「義と平和と聖霊による喜び」（ローマ 14:17）を味わいながら生活するようになりました。人々の人生が変えられ、家庭が変えられ、地域が変えられ、国々が変えられ、世界が変えられてきたのです。「福音」は神の国について教えるものだけではなく、神の国の一部です。それは、神の恵みの支配を私たちにもたらす力です。

ペテロの家での癒やしのみわざは、おそらく夜中までも続いたでしょう。しかし、イエスご自身はその疲れを癒やすこともなく朝早くから祈りの時を持ちました。人々はイエスを探し出して「イエスが自分たちから離れて行かないよう引き止めておこうと」しました（42 節）。イエスが身近にいれば、こんなに便利なことはないからです。しかし、イエスは人々にこう言いました。「ほかの町々にも、どうしても神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」（43 節）イエスにとって一番大切なことは、福音を広めることでした。イエスは父なる神から与えられたその使命をはっきりと自覚していました。そし

て、イエスは、その第一のことを第一にして、働いたのです。私たち、イエスを信じる者たちは、同じ使命をイエスから授かっています。「私は福音を証し、他の人と分かち合うために、救われた。」私たちもこの自覚をいただいて、それぞれができる方法で、宣教の働きに参加したいと思います。

（祈り）

父なる神さま。私たちは、あなたがイエスに与えられた「福音を広める」という使命を、イエスから引き継いでいます。人々がどんなに福音を必要としているか、人を救うどんなに大きな力が福音にあるかを私たちに教えてください。そして、この福音を伝え、証しする力を、さらに求める者としてください。主イエスのお名前で祈ります。

イエスに従う
ルカ 5:1-11

5:1 さて、群衆が神のことばを聞こうとしてイエスに押し迫って来たとき、イエスはゲネサレ湖の岸辺に立って、
5:2 岸辺に小舟が二艘あるのをご覧になった。漁師たちは舟から降りて網を洗っていた。
5:3 イエスはそのうちの一つ、シモンの舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして腰を下ろし、舟から群衆を教え始められた。
5:4 話が終わるとシモンに言われた。「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい。」
5:5 すると、シモンが答えた。「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですので、網を下ろしてみましょう。」
5:6 そして、そのとおりにすると、おびただしい数の魚が入り、網が破れそうになった。
5:7 そこで別の舟にいた仲間の者たちに、助けに来てくれるよう合図した。彼らがやって来て、魚を二艘の舟いっぱいに引き上げたところ、両方とも沈みそうになった。
5:8 これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して言った。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」
5:9 彼も、一緒にいた者たちもみな、自分たちが捕った魚のことで驚いたのであった。
5:10 シモンの仲間の、ゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。」
5:11 彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った。

一、大漁の奇蹟

イエスはガリラヤ湖に面したカペナウムの町を本拠地

とし、そこから各地で福音を宣べ伝えました。イエスの最初の弟子、ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネは、ガリラヤ湖の漁師たちでした。

ある日、ペテロはガリラヤ湖で夜通し漁をしましたが、一匹も魚が捕れませんでした。ガリラヤ湖のことなら何でも知っていて、漁をして魚が捕れなかったことなどめったになかったシモン・ペテロにとっては、ほんとうに残念な朝でした。次の漁に備えて網を洗っていましたが、きっと、疲れも、眠気も、普段の倍は感じ、とても不機嫌だったことでしょう。

そこにイエスがやって来て、ペテロの舟に乗り込み、そこから岸辺にいる人々を教えました。それが終わると、イエスはペテロに「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい」（4節）と言いました。ペテロはイエスが自分のしゅうとめの病気や大勢の病人を癒やした奇蹟を目の当たりにしていましたので、イエスが神から遣わされた特別な人であると信じ、尊敬と信頼を寄せていました。しかし、「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい」という言葉には、内心、こう思ったことでしょう。「ああ、イエスはやはり山里ナザレの人だ。ガリラヤ湖のことは何もご存知ない。魚は浅瀬にいるもので、深みで捕れるわけはない。それに、今は昼日中。こんな時間に漁をしても無駄だということを、イエスはご存知ないのだ。」

けれども、ペテロは「でも、おことばですので、網を下ろしてみましょう」（5節）と言って、網を下ろしまし

た。すると、網が破れそうになるほどの魚がとれ、もう一艘の舟にも助けてもらいましたが、両方の舟とも、魚の重みで沈みそうになったほどでした。これが「大漁の奇蹟」と言われるもので、この時からペテロは漁師をやめてイエスに従い、宣教の働きをするようになりました。人々に福音を語って、神の国へと導き入れる「人間を捕る漁師」への第一歩を踏み出したのです。

二、罪の自覚

ここで興味深いことは、この奇蹟に対するペテロの反応です。ペテロの性格から考えると、大喜びして、舟の上ではねまわり、「イエスさま。あなたはすごい方です。私は、あなたに従います」と言ってもよかったでしょう。それがペテロらしいと思います。ところが、ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」（8節）と言いました。ペテロはこの奇蹟によって深い罪の自覚へと導かれたのです。イエスの神としての栄光を見る時、人は自分のうちにある闇の部分に気付くのですが、この時、ペテロが「私は罪深い人間です」と言った、その「罪」とは、いったいどんな罪だったのでしょうか。

聖書には「罪」を表す言葉がいくつかありますが、そのひとつが「罪過」です。ギリシャ語で「パラプトーマ」と言います。「罪過」には「過（ぎる）」という漢字が入っているように、神が定めた制限をこえることを意味します。神は私たちの生活に一定の制限を設けておられ、そのために十戒をはじめとするいくつかの戒めを

くださいました。こんにち、多くの人々が、神の戒めを束縛と考え、それに逆らって生きることが「自由」だと考えるようになりましたが、神の戒めは、決して束縛ではなく、それを守る時、人は最も幸せになれるのです。それは、神の保護、守りなのです。列車はレールの上に乗っていて、はじめて「安全」に「自由」に走ることができるのと同じです。神が定めてくださったものを無視したり、それに逆らうこと、それが「罪過」の罪です。

では、何もしないでいれば、罪を犯さなくてすむのでしょうか。いいえ、聖書は、ヤコブ 4:17 で「なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です」と言っています。聖書は、「悪いことさえしなければ、それでよい」とは教えていません。人の心を傷つけることがなくても、身近にいる人が励ましや慰めを必要としている時に知らん顔をしていること、目の前で間違ったことが行なわれているのに、見てみぬふりをすることなども「罪」に数えられます。

イエスが御国の位に着く時、イエスは、正しい人々にこう言って、御国に招きます。「あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渇いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれた。」しかし、不正な人々にはこう言われるのです。「おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物

をくれず、渇いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。」（マタイ 25:31-46）イエスは、その審判の時、私たちが「してはいけないことをした」ことを責めるだけでなく、「なすべきことをしなかった」ことも責められるのです。

聖書が教える基準はとても高いものですが、それは、人間が神の期待にこたえることができるものとして造られた、価値あるものだからです。神が私たちに期待しておられることをしないこと、また、したとしても、きわめて義務的に、おざなりにすることを聖書は「怠慢」（ギリシャ語で「アルゴス」）の罪と呼んでいます。

それから、「的外れ」という「罪」があります。ギリシャ語で「ハマルティア」と言います。私たちの向かっている方向が、神が定めた方向とずれていること、それが「罪」だというのです。野球でどんなに遠くにボールを打ったとしても、ボールがラインから外れていたらホームランにはなりません。ファールです。同じように、私たちの人生も、どんなに真面目で、熱心で、勤勉であったとしても、その心と行いが神の求めておられる方向に向かっていなければ、それは罪になるのです。「真面目であること」、「熱心であること」、「勤勉であること」はみな良いことです。しかし、その方向を間違えると、本来良いものが悪いものとなってしまいます。人間にとってもっとも望ましいものは「愛」です

が、それもまた、方向を間違えると、とんでもないことになります。子どもを溺愛して駄目にしてしまったり、他の人の配偶者を横取りしたり、愛人に貢ぐために会社のお金を盗むなどといったことが、現実の社会で実際に起っています。「愛」という一番美しいものが一番醜いものになる。ここに罪の恐ろしさ、惨めさがあります。

今、あげた三つのことを自分にあてはめてみると、「私はどの罪も犯していない」と言うことができる人は誰もいないことが分かるでしょう。私たちは、神の定めからはみ出し、それでいて神の求めておられるものに届かず、的外れなことをしてきた「罪びと」です。

しかし、ペテロの「私は罪深い者です」との叫びは、この三つのどれでもない種類の罪の自覚から生まれています。それは、預言者イザヤが、幻の中で神に出会い、「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから」（イザヤ 6:5）と言った叫びに通じるものです。「私は、もうだめだ」というのは、「私は滅んでしまう」という意味です。乾いた砂は、手で握っているときは、形を保っていますが、手から離すと、崩れ落ちてしまいます。イザヤは、そのように自分が塵や灰になっていくかのように感じたのです。それは、創造者である神の前に被造物として立たされたときに生じる感覚です。全く「聖」であるお方の前に引き出されるとき、私たちは自分の汚れを心底、思い知らされて、震えおののく他ありません。イザヤ

は、聖なる神の前には、自分が罪ある存在でしかないことを示されて、そう叫んだのです。

ペテロもまた、イエスのなさった奇蹟を体験して、イエスの権威の前にうちのめされました。そして、イザヤと同じように、罪の性質を持った自分を知って、「私は罪深い者です」と叫んだのです。

三、召命の原点

この罪の自覚の体験は、ペテロの、イエスに従う生涯の原点となりました。ちょうど、イザヤが、聖なる神の前に自分が「滅びるばかりの者」であることを知らされたのち、預言者としての召命にこたえていったのと同じです。

イエス・キリストを信じる者は、イエスの十字架の血によってその罪が赦されていることを知っています。私たちはパウロと共に「罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです」（ローマ 8:34）と言うことができます。しかし、そのパウロは、同時に「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです」（テモテ第一 1:15）と言っています。パウロは生涯、自分が罪びとであるとの自覚をもって生きました。罪の刑罰は、イエスの身代わりの死によって、すでに取り除かれています。今、私たちは聖霊の働きによって罪の力か

ら守られ、罪の性質からきよめられつつあります。イエスが再びおいでになるときには、罪の存在そのものからも救われます。しかし、だからと言って、自分の罪を忘れてしまっていいのではありません。自分の罪が分からない人は、罪からの救いも分かりません。それが分からなければ、神の愛も、イエスの十字架によって罪が赦されるという福音をも証しすることができないのです。

イエスが弟子たちの足を洗ったとき、ペテロは「決して私の足をお洗いにならないでください」と言いました。ペテロには、先生であるイエスにそんなことはさせられないという思いとともに、「私は、主に洗っていただくにはあまりに罪深い」という思いがあったかもしれません。しかし、イエスはペテロにこう答えました。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」（ヨハネ 13:8）私たちは、神と人とを隔てているものが「罪」であることを知っています。ところが、イエスは「もしわたしが（あなたの罪を）洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません」と言われたのです。自分が罪びとであること深く自覚し、それゆえ、私には罪を赦し、きよめてくださる主イエスが必要なのだと確信すること、それが、私たちをイエスに近づけ、イエスとつなげてくれるのです。「罪」は、私たちを神から遠ざけます。しかし、「罪の自覚」と「罪の悔い改め」は、私たちを神へと近づけるのです。

人が自分の罪を知らされるのは、神の聖さを示され、

それに触れるからなのですが、それは、聖なる神のほうから人間に、ご自分を現し、近づいてくださらなければ始まらないことです。実際、聖なる神が罪深い人間に近づいてくださったのです。ここに神の愛があります。私たちが罪の自覚を持つのは、神の愛から出ているのです。ペテロは叫びました。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」ところが、イエスはペテロから離れるどころか、みずからペテロに近づき、ペテロをいつも身近に置いて訓練してくださいました。

ここにイエスに従う者の出発点があります。私たちがイエスに立ち返ることができる原点があります。私は罪びと。しかし、イエスはこの罪びとを愛してくださった。この自覚と確信が、私たちの信仰を深め、奉仕に祝福を与えるのです。

（祈り）

聖なる神さま。あなたの前に立つ時、私たちは、自分が塵や灰のように崩れていく存在であることを感じます。「主よ。私から離れてください」と叫ばなければならない者です。しかし、イエスは、そんな私たちに赦しときよめの恵みをもって近づいてくださいます。ですから、罪びとのままで、あなたの胸に飛び込みます。私たちをあなたのものとし、罪びとへのあなたの愛と、罪の赦しの福音を語り伝える者としてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

福音と日本文化 ⑧ ―あとがきにかえて

1912 年から 1926 年まで、15 年の「大正時代」は日本の「民主化」とあいまって、宣教の拡大があった時代でした。1912 年に 79,000 人だった信徒数は 1926 年には 166,673 人へと倍増しました。

1914 年から 3 年間、「全国協同伝道」が行われ、各地で多くの聴衆と求道者を得ました。また、ムーディ聖書学校で学んでいた中田重治は 1898 年に帰国後、カフマン、キルボルン、笹尾鉄三郎らと東京に「中央福音伝道館」を開き熱心な伝道活動を行いました。1918 年には、キリストの再臨を強調するようになった内村鑑三とともに再臨待望の共同講演会なども行っています。

中田羽後は中田重治の次男で、1919 年、ロサンゼルス聖書学院（現在のバイオラ大学）に留学し、数多くの賛美歌、福音唱歌を翻訳し、戦前には「リバイバル聖歌」を、戦後は「聖歌」を編纂しました。「聖歌」には笹尾鉄三郎の作詞による「きょうまで守られ」や「ひとりの御子を」なども数多く収められ、礼拝だけでなく、伝道集会や修養会で用いられてきました。

中尾フィリップ

Penguin Club
www.penguinclub.net